MINAMI KYUSYU NO JOKAKU
南九州の城郭
第13号
南九州城郭談話会報
平成12（2000）年2月10日発行

中世の八代城

鶴嶋俊彦

1　はじめに

八代は古代の郡名に由来した広域的な地名であるが，中世には球磨川の河口近くの右岸の山際，現在の八代市古麓町から宮地町一帯を指す狭域的な地名としても使われた。この地は古代以来の陸上交通と球磨川の水運の結節点として重要な位置にあり，不知火海東岸地域支配の拠点として名和氏・相良氏が城郭を構えて争奪を繰り返し，南北朝の内乱では南朝方の御所も置かれ，戦国時代末には島津氏の九州覇権の軍事拠点ともなっている。

この要衝の地に築かれた城郭を近世以降は「古麓城」と呼称している。現在の城跡の比定は，近世地誌に登場する城名に因る『八代市史』の説が基礎となって，『熊本県の中世城跡』や『日本城郭大系』に受け継がれている。しかし，八代城は『八代日記』などの豊富な史料があり，今回，城跡の実態に近づくため史料の検討と城郭遺構の踏査を行った。本稿では調査結果の概略を述べ，詳細は別稿に譲る。

2　中世史料に見える「八代」の城

「八代」に始めて城が築かれたのは，建武二年(1335)に八代荘の地頭職を獲得した名和義高の地頭代として八代に下向した内河義真によってとみられる。『太平記』には八代の城として「内河城」，『阿蘇家文書』に「八代城」の名が見える。南北朝内乱の最中，「宮地鳥越城」「宮地原御陣」「八町嶽城」「八代御陣」などの南朝方の「八代」近辺の城郭が散見する。両朝合一後は八代は名和氏の支配にあるが，文明三年(1471)以降，相良為続が度々「八代城」を襲い，同十六年(1484)には為続が入城する。しかし，明応七年(1498)には再び名和氏が城主となる。相良長毎は文亀二年(1502)から度々八代を襲い，永正元年(1504)に「八代城」入城を果たし，以後，天正9年(1581)の島津氏への降伏まで八代城主は相良氏である。この間，「八代」では天文3年(1534)に鷹峯城が完成し長唯（義滋）が在城し，以後「本城」「たかの峯城」「城山」「松尾」「新城」「丸山ノ城」「八代麓城」「鷹峯」の用語が散見する。一方，城下については鷹峯城の完成後に「御内」「陣内」と呼称される麓の館，杭瀬三町（一日町，七日町，九日町）の商人町，正法寺・正厳寺・宝教寺・立城寺・東泉寺などの寺院が見え，また，「砥崎」・「堀内」に家臣団屋敷があったことが判る。

天正十五年(1587)四月には島津征服により秀吉が八代に入り，福島正則が八代城の守将となり，同年六月の佐々成政の入国後はその番代が置かれ，同年七月の「国衆一揆」では相良氏が八代城を一時占拠したと伝え，翌年の小西行長の知行により球磨川河口に麦島城が築城されるにおよび，八代城は拠点としての地位を失うことになった。

3　現存する城郭遺構群

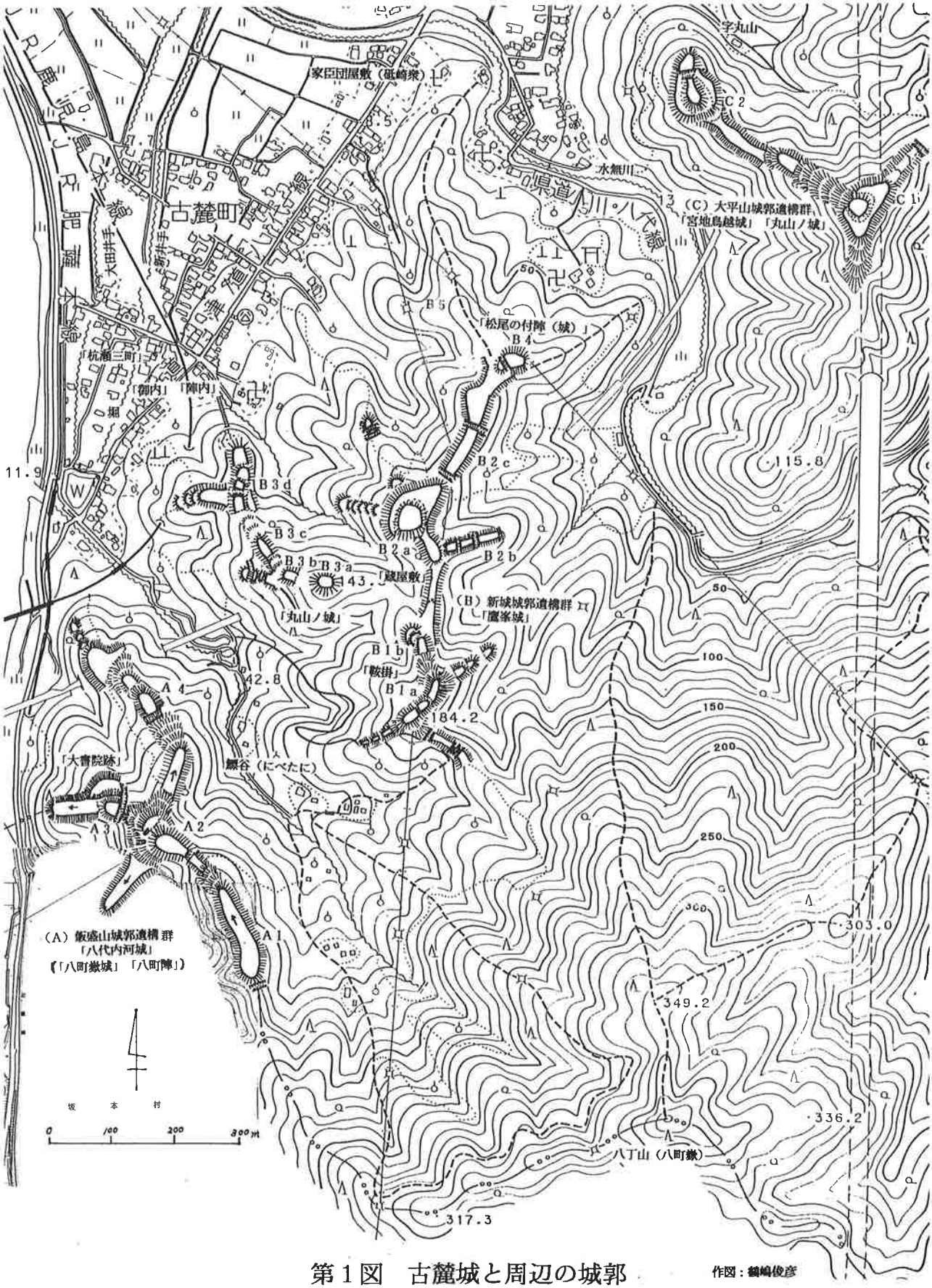
城郭遺構群は標高376.1mを主峰とする八丁山の北西側の二つの枝峯にある飯盛山周辺と新城周辺，これと水無川対岸の大平山周辺の３箇所にまとまった遺構として残る。

Ａ飯盛山城郭遺構群　球磨川の右岸直上の八丁山の西側枝峯に位置する。『八代市史』のいう「飯盛山城」に該当する。標高193.5mの細尾根頂部（Ａ１）の主峰側に幅５ｍの堀切があり，八丁山側からの敵を遮断する。この尾根に続き標高156.5ｍの送電線鉄塔のある曲輪（Ａ２）があり，主峰側に高さ４ｍの切岸がある。この曲輪の北西斜面には小規模な横堀と竪堀があり曲輪への虎口を作る。この虎口と連続する北西の尾根の先端には標高112.1mの曲輪（Ａ３）があり，北側斜面に２段の腰曲輪とその東側にはＡ２の曲輪側と遮断する竪堀となる幅５ｍの堀切がある。この付近は名和氏の「大書院跡」と伝承される。一方，Ａ２曲輪の北側尾根　筋には南側に幅15～18mの堀切をもつ標高93.2mの曲輪（Ａ４）があり，その北側斜面に標高66.8mの曲輪とその下方に小規模な曲輪　が付属する。

Ｂ新城城郭遺構群　八丁山の北西側枝峯に位置するが，三つの城郭遺構群の中で最も規模が大きく，曲輪群が三地区に分かれて配置されている。Ｂ１ａの曲輪は標高184.2mで北東側に低くなる３段の平場からなる。『八代市史』説では「鷹峯城」に比定されている。南東側の八丁山からの細尾根筋を２ヵ所の堀切で遮断するが，八丁山側のそれは二重の堀切となっており，防御性が強い。北側の尾根には送電線鉄塔のある小規模な３段の曲輪（Ｂ１ｂ）がある。堀切などの施設はないが，「鞍掛城」に比定されている。このＢ１の曲輪群の北側の延びた尾根筋には「新城」に比定されているＢ２の曲輪群がある。Ｂ２ａはその標高が134.5mで最も高く，現在は展望所があるが新城城郭遺構群の中では最も曲輪の面積が大きく，北側・西側に広い帯曲輪が付く。Ｂ２ａの曲輪の南側には東へ下る細尾根（Ｂ２ｂ）があるが４本の竪堀となる堀切によって切られている。このＢ２ｂとＢ１ｂの曲輪の間は略平坦な細尾根であるが，その西斜面には「蔵屋敷」の地名が伝承され陶磁器類が採集されている。Ｂ２ａ曲輪の北方は標高109mの平坦な尾根筋（Ｂ２ｃ）で，Ｂ２ａ曲輪の直下に幅６ｍの堀切とこれから90m　北により大きな幅８ｍの竪堀となる堀切があり，防御が強く意識されている。いずれも現在，公園化による木橋が架けられている。また，Ｂ２ａ曲輪から北西に下る尾根筋の標高75mの地点には二重の堀切が設けてある。

一方，上記の曲輪群から西側に延びた尾根筋には，標高143.6mを最高所とする曲輪群が点在する。最高所のＢ３ａの山丘は『肥後国誌』の補注で「丸山ノ城」と呼ばれており，「丸山城」に比定されている。この曲輪の北西尾根にはＢ３ｂ・Ｂ３ｃの小さな曲輪が置かれるが，曲輪Ｂ３ｂの西側に派生する尾根には三重の堀切があり，最下段の堀は北側に下る竪堀となっている。このＢ３の曲輪群の尾根の西端（Ｂ３ｄ）には現在稲荷神社が位置するが，ここに１条の堀切と４つの曲輪が位置する。

以上のＢ１・Ｂ２・Ｂ３の曲輪群はＢ１ｂの曲輪の北側の尾根の交点を中心に南・北・西に派生した枝峯に築かれており，この中心に向かっては堀切などの防御施設は全く設けられていない。したがって，これらの３曲輪群を別個の城郭とはみなしがたく，計画的に築かれた一連の城郭と考えるのが妥当である。



第１図　古麓城と周辺の城郭　　作図：鶴嶋俊彦

Ｃ大平山城郭遺構群　上記二つの城郭遺構群とは水無川を隔てた対岸の標高172.5mの大平山（Ｃ１）とその派生尾根の標高119.5mの頂部（Ｃ２）で新たに確認された城郭である。Ｃ１頂部は現在「岳の観音」が祀られた平場で展望所となっている。頂部の曲輪の北側と南側には腰曲輪が付いている。このＣ１頂部から西方のＣ２へは細尾根が延び，やがて平坦な尾根を経てＣ２の尾根頂部に連続する。Ｃ２頂部は削平のない小曲輪であるが，曲輪の北西直下に幅８ｍの大きな堀切があり，これと連続する腰曲輪が頂部の東・西に設けてある。また，Ｃ１頂部から北東に下る細尾根筋の中腹には，幅５ｍの東側で竪堀となる堀切がある。Ｃ１の南側は急斜面となる地形で，水無川へと落ち込む標高120m程度の細尾根が700m連続している。ここには堀切などの遺構は観察できない。

４　３つの城郭遺構群の構造的特徴

これらの城郭遺構群はその立地する山丘が異なり，相互に連絡する構造は認められず，基本的に各々独立した城郭である。Ａ・Ｂ・Ｃの各城郭は急峻な細尾根の発達した地形的特徴を利用して築城されている。ＡとＣの城郭は一連の山丘と尾根を１条の堀切や切岸で分断して城郭化し，曲輪の削平も不十分なものが多く，城郭全体の規模も小さい。これに対しＢの城郭は細尾根で繋がる３つの山丘を中心に多くの曲輪を設け，その外縁部の尾根に二重・三重の堀切や大規模な堀切を２条配置するなど，大規模化と厳重な防御を意図して普請されている。このＢの城郭は西側麓の相良氏の城下との位置関係が密接である。

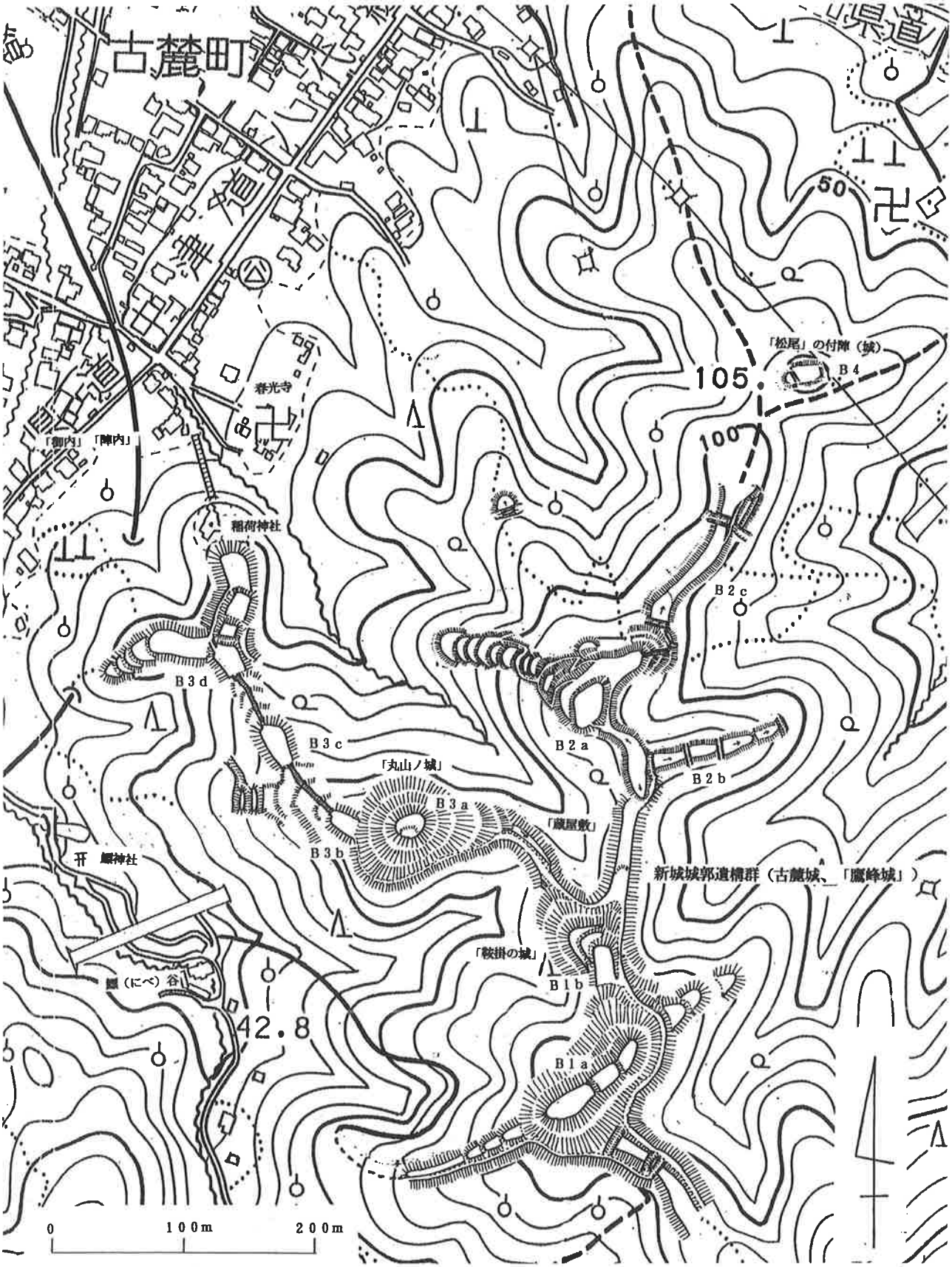
５　城郭遺構群の城名比定

まず，Ｃの城郭は水無川の右岸の宮地側にあり，狭義の「八代城」との関係は薄い。史料上は，元中８年（1391）の「宮地鳥越城」と，永禄２年（1559）の「八代退衆」のいた「丸山ノ城」もＣ２の曲輪の北側に隣接して字丸山があり候補となる。

Ｂの城郭には現在字名として「新城」がＢ２曲輪側に伝わる。「新城」は天文３年に相良氏が新たに築城した「鷹峯城」を指すものと考えられ史料に散見されるが，現存する城郭遺構の構造・配置から広くＢの城郭を指していたとみられる。因みに相良氏の八代支配後に見える「本城」「新城」「八代城山」「八代本城」は，「鷹峯城」のことと考えられる。なお，Ｂ３付近を近世には「丸山ノ城」と呼んでいたことは前述のとおりである。

一方，『八代日記』永禄６年（1563）には「松尾」「クラカケ」の地名が見える。『肥後国誌』「鰾大明神」条や，Ｂ１ｂ～Ｂ３ａ曲輪の鞍部の「鞍掛大明神」の鎮座から，近世にはＢ１ａ曲輪の山丘付近を「鞍掛山」と呼称していたと推定される。『肥後国誌』に出る「鞍掛」の城はこの山丘を言ったものと理解される。「松尾」は『洞然長状』文亀２年（1502）に相良氏が八代攻撃において付陣した場所である。新城城郭遺構群の北端尾根のＢ４地点にはこの城郭遺構群に面するように小規模な堀切が築かれており，文亀２年の名和氏攻撃の際に相良氏側が設けた付陣，あるいは『歴代参考』永禄６年（1563）の島津義弘の八代麓城攻めの付城の可能性が考えられる。『肥後国誌』にある「勝尾城」は，音の類似から「松尾の付陣（城）」をさすのではなかろうか。

最後にＡの飯盛山城郭遺構群は，相良氏が天文３年にＢの「鷹峯城」に新城を築いていること，城内の中腹に「名和氏の大書院跡」と伝承される曲輪があることから，名和氏（内河氏）の「八代内河城」「八代城」と考えられる。名和氏代の史料に見える「八町嶽城」「八町陣」は，八丁山頂上部周辺に城郭遺構が皆無であることから，その西側山腹の飯盛山城郭遺構群を指すものとみられる。



第２図　古麓城の城郭遺構群

作図：鶴嶋俊彦

◆◆ 第13回見学会・例会報告 ◆◆

深　野　信　之

12月11日(土)に発掘調査が行われていた串木野城跡の見学会，12日(日)に吹上町伊作城跡の見学会および例会が開催された。

◎ 串木野城跡見学会

串木野城は，13世紀初頭の串木野三郎忠道が最初の城主と伝えられ，5代串木野七郎忠秋までの約120年間，串木野氏の居城であった。しかし，忠秋が興国3年（1342）島津貞久（5代）に滅ぼされた後は島津氏の支配するところとなっている。

城は五反田川に沿ったシラス台地先端とその周囲に築かれ，近世麓の中央部に位置し，南側裾部には御仮屋跡がある。今回の城内への入口前にも，武家門とひとつばの老木があり，藩政時代の雰囲気が感じられた。

現地では串木野市教育委員会の濱田純一氏，埋蔵文化財センターの堂込秀人氏から検出された虎口や2棟の建物跡について説明があったが，発掘された曲輪上には無数の柱穴が不規則に存在しており，遺構判別の際の困難さを実感できるものであった。同時に出土品も展示されており，90名の見学者それぞれが串木野城の性格について意見を交換した。

見学会終了後，三木会長ほか有志数名は会長の案内のもと，日吉町吉利に残る下地中分線を辿り，夕闇迫る中世の名残を探訪した。

◎ 伊作城跡見学会

伊作城跡は伊作島津家の居城で，10代忠良（日新斎）が勢力を広げ，息子の貴久は島津本家の15代当主となっており，近世島津家の発祥地とされている。本丸にあたる亀丸城には，忠良や貴久の息子の義久・義弘・歳久・家久の誕生石があり，関ヶ原400年を控えて，激動の時代を生きた武将たちの少年時代に思いをめぐらせることができた。

吹上町教育委員会の常田氏のご案内で城内の一部を見学したが，曲輪上から見た空堀は崖という表現の方がふさわしく，攻撃しづらいというよりも攻撃したくない印象であった。またシラスの崩落のため埋まった空堀は，シラス台地に築かれた山城の保存の難しさを示していた。幸い天候もよく，80名の参加者は快適に広大な山城のハイキングを堪能した。

◎ 例　会

午前中の見学会から吹上町中央公民館に場所を移し，例会を行った。会場は満席になるほどの盛況で，発表も熱のこもったものであった。発表は下記のとおりである。

三木靖会長「伊作城の歴史と構造」，佐藤亜聖・宇田員将会員「日輪城跡（恒吉城）の発掘調査について」，福田泰典会員「野尻城の発掘調査について」，各地の城館調査。

発表された遺跡を含め各地で城館の調査が行われ，新たな資料が増加している。三木会長が「城館の調査研究はまだ始まったばかり」と言われたように，着実に資料を増加させ，整理することが歴史を明らかにしていく基礎になることを再認識した。

串　木　野　城　跡

調査速報

国指定史跡知覧城跡

－蔵之城跡の発掘調査－

知覧町教育委員会

1　調査の経緯

鹿児島県知覧町では，平成10年から国県の補助を得て保存整備に伴う事前の発掘調査を行っている（記念物保存修理・国指定史跡　知覧城跡保存整備事業）。

平成10年度は，排水・園路整備に関連し，今城と本丸間の空堀を発掘調査した。その結果，地表面から約7m下に堀底を確認することができた。さらに，この堀底の検出面と現存する本丸下の外枡形虎口面の高さが同じであることが判明。この事実から，現存する外枡形虎口の遺構は，当時の現況をよく残していることが考えられ，一方，本丸・今城間の空堀は長い年月を経て相当土砂が堆積していたことがわかった。

2　平成11年度の発掘調査

知覧城跡の1つ，蔵之城跡における曲輪内の建物跡等遺構の検出と年代を把握し，同時に虎口の構造を明らかにするのを目的に発掘調査を実施した。調査は，平成11年11月～平成12年1月まで。発掘調査面積は約50㎡。地表面から約40㎝下が中世の遺物包含層である。柱穴等遺構の検出は，アカホヤ層上において確認される。

蔵之城の曲輪面において柱穴約160個を確認した。さらに虎口面においては，多少折り曲げて築かれており，防御を意図した工夫が読み取れる。

出土遺物は，青磁・白磁・青花をはじめタイ産陶器，褐釉陶器などの国外産を中心として，備前焼，土師器などの国内産，それに古銭（洪武通宝・永樂通宝），鉄くぎや鉄製品，鍛冶滓，取部など金属関連遺物，硯，滑石製品，碁石，炭化した粟？などが出土している。これらは14世紀後半16世紀後半時期のものと考えられる（大橋康二氏鑑定指導による）。

蔵之城跡の遺構

3　まとめ

蔵之城跡は本丸・今城・弓場城等，本城郭群中の中枢となる曲輪の一つである。本丸と蔵之城への入城ルートは，中心部分の外枡形虎口を中継しており，このことからも本丸と同様重要な曲輪の一群であることがわかる。その名称から物資供給の蔵ないしは矢倉等が存在したことが想定された。柱穴等のピットが約160基検出され，その中でも穴の幅40㎝以上，深さ1mをこえる遺構が数基発見されている。掘立柱によるしっかりした建物の存在が想定される。さらに幾度となく建て替えがなされたと考えられる。平成4年に発掘調査した本丸跡に比べ出土遺物量，種類の豊富さには欠ける。今後，建物跡の構造の解明や出土遺物の年代特定，本丸等他の曲輪群との出土遺物の組成の違い，土中に残存した微小遺物の理化学的な分析等を行い，知覧城跡の立体的な復元を試み，南薩摩の中世とその社会を探っていきたい。

（文責：上田耕・若松重弘）

知覧城跡全景

出版物のご案内

宮崎県教育委員会から下記の報告書が刊行されました。

・1998　『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ－地名表・分布地図編－』Ａ４版223頁

・1999　『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ－詳説編－』Ａ４版263頁

・販売代金　4,200円（２冊合計）

・問合先　〒880-0805 宮崎市橘通東1-9-10
宮崎県教育委員会文化課　吉本正典
TEL 0985-26-7251（文化課）
090-1192-6111（携帯）

お知らせ

◆　第15回の見学会・例会は５月鹿児島県高山町で開催の予定。

◆　川元茂信会員が南九州城郭談話会のホームページを開設しています。
URL http://www.satsuma.nejp/myhome/kawamoto/danwa.html

出版物のご案内

機関誌『南九州城郭研究』創刊号

残部僅少！

購入希望の方は，下記手続きをお願いします。

・最寄りの郵便局において代金1,500円（非会員は1,800円）を「**口座番号 01760-3-84609，南九州城郭談話会**」までお払い込み下さい。確認次第，創刊号を送付します。なお，送料は当方で負担します。

・問合先
〒899-5421
鹿児島県姶良郡姶良町東餅田498番地
姶良町歴史民俗資料館　気付
下　鶴　　弘
TEL 0995－65－1553
FAX 0995－66－5820

【新入会員】　（12月１日現在）

朝隈　兼典	芹野　慎也	田中　一成
知名　定順	中馬　庄吾	長野瑳や子
永峯　和子	西村久美子	西村　　肇
前田　正弘	右田　文子	宮内　洋子
宮崎　裕子	吉村　瑞子	

事務局便り

◎機関誌『南九州城郭研究』創刊号
Ａ４版96頁（詳細は本頁参照）

・五味　克夫「菱刈本城城主考」
・堂込　秀人「中世南九州の竪穴建物跡」
・高田　　徹「肥後加藤領南端の城郭」
・山本　正昭「玉城グスクの復元的予察」
・三木　　靖「奄美の中世城郭について」他

編集後記

◆会が発足して４年が経過しました。会員数も260名を越し，見学会・例会には100名近い方々が参加するようになりました。これも皆様方の御協力，熱意の賜と感謝申し上げます。幹事としては，大変嬉しい限りですが，その反面，事務量等が増加しております。今後は，より多くの方々の御協力が必要となります。宜しくお願いいたします。

◆今号には人吉市の鶴嶋俊彦氏による中世の八代城を掲載しました。文献と精力的な現地調査とが結びついた労作です。また，会の事務局長の上田耕氏からは，知覧城跡の発掘調査の速報を頂きました。タイ産の陶器が多数出土しているようで，近年の，鹿児島での這種の遺物の発見には瞠目すべきものが多いようです。今後は，こうした資料の蓄積によって，海外との交易の問題にも迫ることができると思われます。

◆次号の会報発行は，５月上旬の予定です。原稿は下記まで。　(Shige)
重久淳一 〒899-5106 姶良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭　第13号

発行所　鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内　上田耕　気付
南九州城郭談話会
（振替口座　02040－6－37850）
発行者　三　木　　靖
編集者　重　久　淳　一
印刷所　㈱トライ社
入会金500円　年会費1,000円